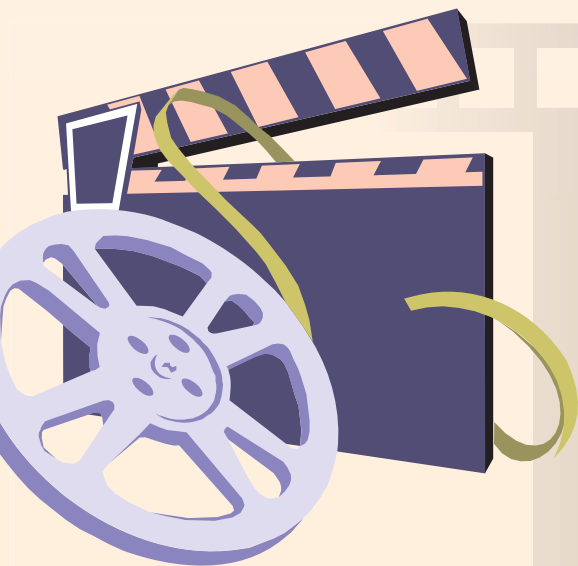




第10回

シネマの中の高齢者

スペイン内戦を背景に描く、少年と老教師の心の交流…『蝶の舌』

物語の舞台はスペイン北西部、自然豊かなガリシア地方にある小さな村。ぜん息持ちで人見知りのモンチョは、ほかの子より遅れて小学生になり、学校の初日、緊張のため教室でおしっこを漏らしてしまう。だが、担任の老教師グレゴリオが心優しいうえに、子どもたちを森へ連れていき、自然の神秘を通して学ばせる先生だったので、少年はだんだん学校生活に慣れていく。特に少年が魅了されたのは、蝶の舌についての秘密だった。

しかし、時代は1936年というスペイン内戦勃発の年を迎え、小さな村にも混迷の時代が訪れる。ある日、広場に集まった群衆の前でファシズムに反対する共和派の人たちが逮捕され、モンチョ少年の目前で、両手を縛られて罪人のように一人ひとり連行される。その中にグレゴリオ先生の姿があったのだ。家族を守ろうとする母親に命じられ、意味もわからず、みんなと同じように先生へ「不信心者、アカ」と罵声を浴びせる少年だったが…。

少年と老教師の心の交流を描く感動作のようであり、その実、スペイン現代史における暗部を扱った本作。読み解く鍵は2つある。1つは、リベ



©Sociedad General de Cine, S.A./Las Producciones del Escorpión, S.L.

ラルな教育方針を持つグレゴリオ先生の人物像。詩や自然観察を愛し、子どもの自発性に委ねる先生の教育方針は自由主義的だが、農民、神父、音楽家、町長といった村人たちは、左派の共和派と保守派、真っ二つに割れている。そのなかで、グレゴリオ先生の自由であろうとする立場が、悲劇を招く。

もう1つは、この内戦の後、ガリシア地方出身の独裁者フランコが40年近くスペインで独裁権力を握ったという歴史的事実。この映画にフランコ総統は登場しないが、自分たちの身を守るために、モンチョ少年やその家族が愚かな嘘をつかざるを得ない状況が、軍人政権による圧政の予兆となる。時代の荒波に飲まれていく少年の瞳に、いったい何が映ったのか。それを簡単に示さないとこが、作品に深みと余韻を与えている。

金子 遊（映像作家・批評家）

蝶の舌

監督：ホセ・ルイス・クエルダ
音楽：アレハンドロ・アメナバル
出演：フェルナンド・フェルナ・ゴメス、マヌエル・ロサノほか
DVD 発売中：アスミック、角川映画、
定価 1,890 円（税込）

